

〔瀬戸内町調査報告講演記録〕

## 瀬戸内町の竈神信仰 — 沖縄県下と比べて —

窪 徳 忠

私はここ30年来、中国の宗教文化の日本への伝来という問題に興味をもっているが、沖縄国際大学の奄美調査に参加させて頂いた当初から、もっぱら竈神の信仰について調べている。最初に、その理由について説明しておきたい。

沖縄県地方は、琉球王国時代には、14世紀末以来約500年にわたって、中国の冊封体制下に組み入れられていた。冊封体制とは、簡単にいえば、いまの自治区同様、王の即位が中国皇帝の承認を必要とする以外は、広範な自治が認められている制度で、その任命の使者が冊封使である。そのために中国とはきわめて密接な関係があった上に、14世紀末以後36姓と通称されている福建人たちが渡来し、政治顧問も招かれていた。従って、沖縄県地方には中国の習俗や信仰が多く伝来し、その名残りは今日なお濃厚に認められる。道の突当りにたてる石敢当、門と母屋とのあいだに造るフィンブン、墓参や法事の折に焼くウチカビという紙銭、上棟式の際に棟木にかく天官賜福紫微鑾駕(紫微鑾駕はその略)、道路などに落ちている字をかいた紙を集めてやく特別な炉のフンジュル、鶏・魚・豚肉を中心としたウサンミという供物などはその一例である。いわゆるフンシは風水説、シーミーの墓参は清明日の掃墓の、それぞれ影響に相違ない。神では、3世紀の武将関羽を神格化した関聖帝君、ブサと通称されている海上安全の守り神の媽祖、トーティークー、トテコン、トーティークンなどとよばれている土地神、通称をフィジャイという墓の守り神、ニーノファーノフシという北斗七星などの他に、一時は中国の道教とよぶ特異な宗教の最高神とよんでいい三清や玉皇上帝などまで伝来、受容されていた。いま那覇の孔子廟の一廊にある天尊廟の本尊は、道教で最高の雷神とされている九天応元雷声普化天尊である。沖縄県地方が、いかに多く中国の宗教文化の影響を受けているかということは、以上のような簡単な指摘によるだけでも十分にご了解頂けたと思うが、くわしいことは恐縮ながら拙著『中国文化と南島』や『道教の世界』によって承知していただきたい。

一方、よくご承知のように、奄美地方は13世紀中葉から琉球王国と関係があったと伝えられている上に、薩藩の支配下に入る前の約半世紀の間は琉球王国の1部となっていた。また、薩藩の支配に入ったのちも、いわゆる山原船が沖永良部や徳之島ばかりか、加計呂麻島や大島南部まで、それまでと同様に出入していたという。とすれば、当然多くの中国的宗教文化が琉球を通じて伝えられたに相違ない。このように考えた私は、1978年の九学会連合の奄美調査に参加してから今日までの10年間、中国的と覚しき習俗や信仰の名残りを求めて大島から与論島まで歩いたが、漸くフィンブンに当るツラカクシ(ケリジョウ)、石敢当、紫微鑾駕と、灶神の信

仰を見出したにすぎなかった。そのうち灶神は、土地神と並んで、沖縄県下の普遍的で代表的な神といって差支えない。そこで、灶神の信仰を主な調査対象としたのである。本日は、沖縄県下と比較しながら、ここ2年間行なった瀬戸内町とくに加計呂麻島の調査結果について、簡単に報告して、責めをふさがせていただきたいと思う。なお、くわしいことは、いずれ出版される予定の報告書によってご承知願いたい。

本論に入る前に、その前提として、まず中国の灶神信仰を紹介しておく。私は灶神は火に対する信仰からの発展と考えるが、火や灶の信仰は、ギリシア、ローマや古代インドにもあった。中国における始源時期は不明ながら、孔子が灶の神性に言及しているから、遅くとも前6世紀にあったことは確実である。けれども、老婆が祀っていた点以外はわからない。前2世紀には家族の言動を看視し、毎月晦日に、その結果を天神に報告するために上天する恐しい神とされていたが、前1世紀には一心に祀れば家族を守り、家を繁昌さすという信仰が起り、7世紀以降には善悪双方の言動を報告にいくと考えられるようになって今日に及んでいる。祭日は、前2世紀ごろには毎月晦日、前1世紀から6世紀ごろまでは旧12月8日、10世紀以後は旧12月23日か24日とされていたらしいが、今日では揚子江以北では23日、江南、台湾や東南アジア在住華人のあいだでは24日とされている。ただし、1985年2月に訪れた福建省泉州市内の某家では23日に娘が祀っていたから、例外もある。供物は、古くは酒とわずかな品、ついで黄色の羊、4世紀以後には酒と豚とに変わり、10世紀以後には豚頭、豆、魚その他と品数がふえたが、17世紀以後には更に飴が必須の供物となり、なかには酒糟を灶にぬりつけることもあった。飴はたべた神の唇をねばらせるため、酒糟をぬるのは酔わせるためで、ともに上天した際に悪事を天神に告げさせないための愉快な悪だくみであった。飴や甘い物は、いまでも台湾や東南アジアで供えられている。上天日と考えられている旧12月23日か24日には、一家の男性だけが、悪いことや失礼なことをしたかもしれないが、そんなことは天神に告げないで、下天の折には幸福その他の御利益を持帰ってほしいと祈ったという。古いころの下天日は不明ながら、17世紀以後は大晦日とされていた。そして、家族が悪事をすれば不幸を与え、善い行ないをしていれば、健康、長生きを授け、家を繁昌させる神と信ぜられていた。だから、文献資料には、灶神は「一家の主」で、張単という男神だと記されている。そのために関係のタブーは多く、『敬灶全書』には、灶をみふ、跨ぐこと、女性が灶に腰かけ、雑言、哭泣、夫婦喧嘩、子供を叱ること、灶上で物を切り、たたくこと、附近を不潔にするその他、約40条が説かれていた。

今日では、灶君爺、灶君公、司命灶君などとよばれ、その絵姿は神相図中に画かれて、台所から神棚に移されたので、主婦が毎日朝夕線香を供えて拝むように変った。上天日は、従前通り多くは旧12月23日か24日とされるが、旧8月3日（誕生日）、毎月朔望などという人もあり、きわめて稀だが1日3回といった例もある。下天日は、大晦日、元旦ともいうが、福建系の人々は旧1月4日と考えている場合が多い。上天目的は、一般的には全家族の言動報告と信ぜられているが、なかには主婦の言動報告と思っている女性も少なくない。そのために、灶前のタブーは従前通り主婦に関するものが多い。ただ、台湾の宜蘭や南投県で、灶上の猫を打つつもりだったが、素早く猫が逃げたので、灶をたたいてしまった主人が2、3日して病気になり、ついに

死んだときかされたから、タブーは必ずしも主婦に限られているわけではない。なお、この伝えから、灶その物を神とみる考えがいまなお強い由が窺われる。祀るのは、女性とくに老婆が原則である。供物は、前述と同様ながら、酒糟を塗りつけることはない。祈願内容は、家内安全、商売繁昌が中心で、私の知る範囲

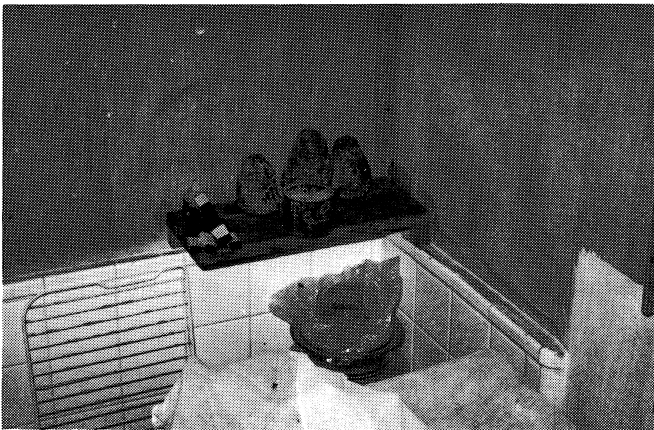


電君公（中華民国台湾省苗栗鎮）

内では悪事を告げないでほしいと祈るところは殆どなかった。1985年にいった山東省威海市近郊の農村の村長から、文革中でも戸を閉めて秘かに祀っていたと聞かされたから、いまなお大陸でも灶神の信仰が生きていることは明白である。泉州市郊外で灶神のヨリシロを売っていたのも、その一証となる。

つぎに、時間の都合上、沖縄県下の信仰について大雑把に報告する。

今日の沖縄県下の灶神信仰は、県下固有の火の信仰に中国の灶神信仰が加味された、いわゆる重層、複合信仰であるが、中国の信仰の伝来した時期はわからない。けれども、各地から出土する中国製陶磁器の年代から推して、13世紀から14世紀にかけてのころだったのではないかと考えている。灶神の称呼は各地によってさまざまだが、それらの称呼は、3個の石を $\circ$ 型に



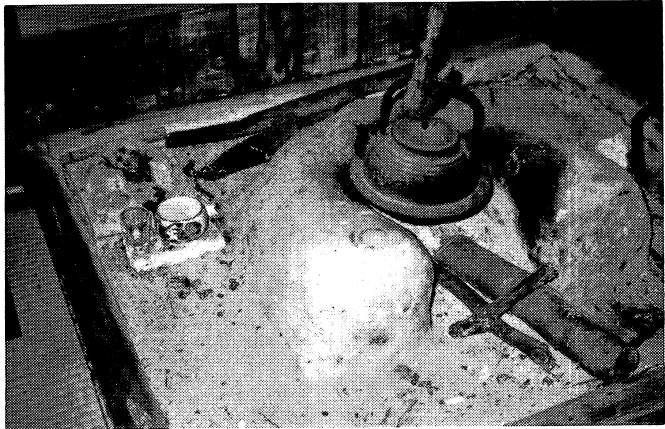
フィヌカン（今帰仁村与那嶺）

おいた原初的灶からの発想と思われるウミチムン系統、灶という称呼に基づくらしいオハマ、オカマガム系、および火の神を意味するフィヌカン系の3つに大別することができる。そうして、例えばウミチムンは首里の旧家や国頭村辺土名、オハマは本部町瀬底や国頭村佐手でよばれているなど、称呼にある地区のみの

偏りが無い。これは、信仰自体に偏りのない反映と思われる。また、与那国町租納でダヌカン、多良間島でヤヌカムというが、これらは家の神の意味なので、中国でいう「一家の主」に当り、中国的信仰内容の受容という点で、いたく注目をひく。古くは、3個の石を $\circ$ 型においた灶自体が神体とされていたが、大和式灶になると灶の周辺におく、海・山・川・野原・田・屋敷内など、さまざまな場所から男が拾ってきた3個の小石か泥を丸めたものをヨリシロとするよう

になり、最近は殆ど香炉のみと変っている。

灶神の数については1人または不明というところが大半ながら、ヨリシロからの連想らしく3人と考えている人々もいる。けれども、中国のように夫婦2人とするところはない。その性別は、女性が祀るのを根拠に女神視する人々が多いが、なかにはユタから



ヒニヤハムガナシ（瀬戸内町（加計呂麻島）西阿室）

の教示らしく、3神中2人が女神で1人が男神とのべた人もいた。けれども、不明というのが実情であろう。尤も、与那国町租納には男神とする民話が伝えられているから、古くは男神1人とされていたようにも思われる。中国の張単という灶神名を知る人は1人もいなかったが、石垣市石垣や久米島の具志川村兼城で、後方の石をウブンガナシ、向って右をアハアリンガナシ、向って左をヨーテンガナシとのべた人々があり、石垣市川平の南風野本家（南風野 本家 大親）以下七軒の旧家では、たとえばウリブウロルモトノウフヤンのように家の始祖を灶神とする特殊例がある。これらについては、その理由や原因がわからないので、今後の考究に譲りたい。

沖縄県下で私の調べた約80%の人々が灶神は上天するといい、約15%が知らない、残りが上天しないとのべたが、これは中国の影響の大きい由を明示するよい証拠である。ほとんどのところで、江南地方や台湾と同様12月24日に上天すると考えているが、宮古の池間島と城辺町保良とでは、その日か翌25日に全ての神が上天するとのべた。地上にいる全ての神が上天するのは、中国の送神に当るので、偶然の一致か否かくわしく考えてみる必要がある。また、三神すべてが上天せず、留守番する神もいるとのべたところが二、三に止まらなかったが、中琉の重層信仰の反映と考えられる。上天目的は、中国同様、家族の善悪の言動の報告とのべたところが圧倒的ながら、主婦の言動や家庭不和の報告といったところもある。また、ごく一部だが、台湾同様（宜蘭）煤のなかに一年中に犯した悪事が入っているから、煤払い後に灶神の上天を送ると告げた人々がいた。これまた、中国の影響とみて大過ないと思われる。

上天日の供物は中国より雑多だが、大雑把にまとめればウブク、餅類、塩、酒などで、中国のように飴や甘い菓子は供えない。線香の数もさまざまだが、たてた線香が燃えつきないうちに次ぎの線香をたてる場合が多い。それは、その煙によって灶神が上天すると信じているためである。ただし、毎朝拝むときには1本である。拝む人は年輩の女性が圧倒的だが、男性、または12月24日は男性、他の日は女性と祭祀日によって性別を違えるところがある。祈願内容は、1年間の加護に対する感謝と翌年の守護の願いが大半だが、旧中国同様、善いことだけをいい、悪事は告げないでくれと願うところが意外に多いことは、中国の影響の根づよいあらわれとして注目される。なお私は、ウガンプトチ（願ほどき）を旧12月24日に行なうことは、中国の送

神の間接の影響ではないかと推測している。

下天日は、大晦日、元旦、2日以降、4日など、場所によってさまざまに伝えているが、2日以降といいながら元旦に灶神を祀るところがある。これは、灶神上天説伝来以前の信仰の名残りではないかと思われる。下天日の祀りは、上天日に比して一般的に簡略であるが、石垣島方面では早朝に海岸の人の踏まない砂と海水とを波のひくごとに7回とり、ヨリシロを海水で浄め、周辺に砂をまくところが多い。拝むのは上天日同様年輩の女性がほとんどで、1年の加護を願うが、首里や那覇の一部では鍋の蓋をかぶって灶の蔭に隠れていると、灶神がもって下りてくる金銀財宝の音がすると伝えている。一、二の人は実際かどうか試そうかと思ったと告げた。

灶神には、出産、死亡、結婚その他家としての慶弔や行事は必ず報告し、私生児の認知、新生児の命名も灶前で行なう上に、毎朝茶の初を供えて祖先の次ぎに拝むから、灶神は中国同様、一家の主、守り神、管理者とされているのは明白である。ただ、場所によっては新婦が結婚の際に拝まず、分家の際に灰を持たず、家族とくに当主夫妻の死亡の際にもヨリシロを廃棄しないところもある。多くの人々は、灶神を幸福・豊作・健康を授け、災いや病気をよけてくれる神と信じる一方で、郵便配達夫のように遠方までも情報を届け、すべてを天神に告げる神として恐れている。那覇の一部に、何でも告げ口をする人をコーディネーター（荒神する人）とよぶ習慣があるのは、荒神が内地でいう灶神の称呼だから、中琉内地の三地方の重層信仰として興味があるのは、荒神を恐れる結果タブーが多いのだろうが、主婦の灶前での叱言、不平不満、陰口、悪口、怒り、哭泣から、夫婦喧嘩、汚れ物を灶上におき、灶に足をかけ、または足を向け、火かき棒で焚口をつくこと、周囲の不潔など、中国と共通の場合も多いが、灶上で箸を揃え、灶をたたく、灶上で物を切ることを禁じていないのは、中国との相違点である。それは炊事場の構造が原因であろう。


このような信仰を県下に流布させたのは、福建からの移住者の子孫である唐栄人、その信仰や習俗を見習った那覇の士族、中国と往来した航海業者や中国への留学生などの他に、ユタ的職能者もいたのではないかと思われる。



さて、つぎに瀬戸内町とくに加計呂麻島の灶神信仰について申述べるが、関係の文献資料がないので、殆ど私の見聞が中心となる。けれども、まだ歩いた範囲は狭く、内容も不十分である。誤り、聞き落し、不足など、お気付きの点があったら、大小となくお教えをいただきたい。

まず、この表によって、奄美各地の称呼から説明させて頂く。これは、ここ10年間に歩いたところの灶神のよび名の表であるが、沖縄県下に比べてシマによって称呼がまちまちの場合が多い。時間の関係で詳しい説明は省かせていただくが、たとえば喜界島ではシマ毎の称呼の相違がとくに顕著なのに対して、沖永良部島では全島ほぼ同じ称呼である。瀬戸内町とくに加計呂麻島は、大体沖永良部と同じ傾向だといって差支えない。このような相違の原因は、いまの私にはわからないので、ご存じの方があればお教えを頂きたい。同じ瀬戸内町でも、大島側と加計呂麻島側とではやや相違があり、さらに加計呂麻のシマによっては、多少他のシマと共通の称呼の場合もある。しかも、それが近接地区でないのも、その理由もわからない。また、ジ

リュやジリヨは灶をしつらえる場所に基づいての称呼だから、これは訳せば灶の神と大体同意となるように思われる。ただ、これらの称呼をイロリと考えて、イロリの神とかいてある報告書があるけれども、ジリヨなどは、内地のイロリとは性質を異にしているように思われる。例えば私の故郷の若狭地方では、イロリで茶や汁は湧かすし、暖もとるが、飯は炊かず、その場を神のいる神聖なところとは考えず、足を火に近づけて平気である。従って、ジリヨをイロリ、もしくは灶ということはできないと考える。だから、その扱いは慎重さが必要だと考えている。しかも、新潟県中魚沼郡の一部ではイロリをジロという由だから、その解釈は仲々むづかしいわけである。なお、加計呂麻島南部や与路島では冬になると、トーグラから表のジリヨにヨリシロを移す家もあった。すると、灶神がイロリにおかれることになる。

奄美全体からみると、火（マツ、マーツ、マチ、ウマツ）に対する信仰がつよいように感ぜられる。灶神の説明がいつの間にか火の神の話となり、灶神をマツの神とよび、火の用心を灶神に願うことなどは、その証拠としてよいように思われる。加計呂麻島ではご覧のように灶神をマツガナシなどとよぶことはないけれども、清水・節子・木慈・瀬相・阿多地・武名・勝能などでは灶神を火の神とする処が多く、阿多地では外出の際に、灶神に留守中の火を守ってほしいと祈って出るとのべた人があった。これらは、火と灶との区別があまり截然としていないことが原因のように思われるが、沖縄県下との相違のひとつであろう。さらに、嘉入などでウチガミサマというのも気になる。私は、ウチガミとは元来は祖先をさすと教えられていたが、嘉入では灶神は家を守る神だからこのようによぶのだと説明された。すると、今日ではウチガミという称呼に新しい解釈が施されているようにも思うが、いかがであろうか。お教ををいただきたい。

灶神は、元来は沖縄県下同様、型に三石をおいた原初的灶その物だったが、大和式灶になった折三小石かミニ灶をヨリシロとし、ついで香炉という変遷を辿っている。与論島のペアンジャナシとよぶ三石の灶は、その名残りであろう。西阿室の元船員から、シュビツとよぶ一升入りの石油缶を灶代りに使用して炊事をしていたが、古くなったので海に棄てたら、先輩船員からそれはヒニヤハムという大へん高い神だから、海になど棄ててはいけなと、叱られたという話をきいたが、これは加計呂麻島でも以前は灶その物を灶神としていたよい証拠となるであろう。清水では灶その物である。

大和式灶となった際に、加計呂麻島でも、徳之島などと同様、灶の焚口の左右双方に火吹竹が茶碗の糸底で型か型のシルシをつけるようになった。その理由は、いまでは忘れられているが、以前の灶の名残りの表現だったと思われる。場合によっては、そこに神がいると考えている人もいるが、一般的ではない。多くはマヨ、目と口などと呼ばれているけれども、なかには称呼まで忘れている人々もいる。南部では○や◎のこともあったという。

加計呂麻島の大部分のところでは、ミニ灶をヨリシロとはするが、そのなかに海や川から拾ってきた三小石を入れるところと入れないところがある。与路島のヨリシロの模型を公民館長に作って頂いたが、中央を少しもり上げ、その真中を凹ませて周囲に三石をたて、その前方を凹ませて砂を入れ、そこに線香をたてる。家によっては持運びに自由なために四角な箱に入れ

るという。現物は公民館で承知して頂きたい。ヨリシロは、家族とくに主人夫妻の死去の際にはこわしてすてる。それは家族を守り切れなかったためである。なかには、主人が死んだために灶神が守り切れなかったとして、信仰をやめた人さえある。死んでから49日、1年など、ある一定期間がたつと造り直す、その折石をなかに入れるところでは、石を拾いにいく人はススキを持ち、拾って帰宅する途中で人にあうと、そのススキを自分の後方に棄てる習俗をもつところが多い。なお、請島のヨリシロは土を入れた箱の後方に3つの山形をつくり、その前に砂をもって線香をたてる由だが、又聞きなので、ご存じの方があつたらお教えいただきたい。また、大島側の清水などではミニ灶はつくらない。このように各地でヨリシロの相違する理由は不明である。これらの灶の焚口にシルシをつけ、ヨリシロが各地で相違するのも、沖縄との相違点である。

神名を知る人は町内でひとりもいなかった。神の数も、1人とのべた木慈以外はだれも知らない。性別については、沖縄と殆ど同様、女が祀るから女神だ、もしくは女神らしいというだけで、実際のところはわかっていない。なお、冗談に主婦をヤーノヒニヤハムという場合があるが（西阿室、須子茂、諸鈍、武名、阿多地、実久、嘉入、押角）、鹿児島でもいう由だから、或はその影響かもしれない。於斉、佐知克、諸鈍では天に上るというが、いわゆる中国の上天説とは異なる。これまた沖縄県下との大きな相違点のひとつであろう。万一、忘れられたとするならば、その時期はかなり以前のことであったと推測される。ただ、旧12月24日に祀らず、多くは旧9月9日、あるいは8月吉日（瀬相）、8月大安日（押角）に、ヒニヤハム祀り（勝能）、ジリョの神祀り（瀬武）などといって、ミキを供え、かなり盛大に祀る。沖縄県下でも旧9月9日にフィヌカンを祀るところがあることを最近知ったが、あるいはそれとの関係があるかもしれない。あるいは天城町浅間との関係も注意する必要がある。けれども、グンギンの祭りなどというから別であろう。

この他には、毎日の朝夕（まれに木慈・須子茂・呑之浦・清水・節子は朝のみ）、食事前に老婆か主婦が線香を1本か3本供えて拝むだけで、結婚、新生児の命名などには拝まない。祈願目的は、多くは家内安全、健康、幸福、災いのないよう、好運、および前述の火の用心などもある。従って、灶神は沖縄県下より火の神としての性格がつよいが、一家の人々を守る神、「一家の守り神」としている点は共通していると考えていいであろう。この他の沖縄県下との相違点としては、分家の折に灰をもたないこと、タブーが殆ど知られていないことなどがあげられるが、とくに後者は他の奄美と比べて加計呂麻島の特長といえるように思われる。ただ、嘉入、阿多地では灶神をまたぐこと、灶に足を向けること（武名でも）を禁じている。節子や清水でも、灶に足を向け、灶の周囲を汚すのを禁じている。節子で主婦がさんばら髪で灶前に立つのを禁じているのは、奄美としては珍しい。そしてこれは、沖縄県下を通じて中国に結びつく。

以上、ご報告申した通り、加計呂麻島の灶神信仰は沖縄県下のそれに比べて、かなり大きく相違している。その相違を一言でいえば、中国的でないことになる。その原因については、今後各方面から十分慎重に考えてみなければならないけれども、いまのところ私は、薩藩の統治方針の結果ではなかったかと憶測している。薩藩は、琉球王国に対しては意識的に異国的な

中国色を残させるように努力する一方、加計呂麻島を含む奄美地方に対しては中国色を極力排除して内地色に従わせるように圧力をかけたのではなかろうか。加計呂麻島は大島と共に、もともと薩摩に近い位置にあったので、その圧力は徳之島以南より一段とつよかったにちがいない。しかも、当時奄美の人々は琉球王国に親近感をもっていたので、それを絶切ろうとした政略もあったであろうと思っている。

大へん大雑把な報告で恐縮だが、一応これで終り、スライドをみて頂いたのちに、不備な点や誤りをご教示いただきたい。

〔附記〕奄美各地の灶神の称呼については、拙著『中国文化と南島』（1981年、第一書房刊）356頁～357頁の表によって承知していただきたい。